

而テ訓導再来ノ期ニ於  
 テハ恐クハ從テ延遲ス  
 ルアラシカ尚本日東萊  
 ニ上リ事實ヲ詳問シテ  
 速ニ報告ス可シ

烈シ船ヲ出スヲ能ハス  
 同十一日 午前第六時大  
 島ヲ發シ午後第四時嚴  
 原ニ達ス  
 同十二日 午前第六時嚴  
 原ヲ發シ午後第三時釜  
 山草梁公館へ達シ上陸

同十八日 五十八度  
 五十七度

同十九日 六十度  
 六十度 陪通事金福珠ノ  
 詔ニ昨日東萊ニ  
 至リ崔在守ノ結果ヲ尋  
 及スルニ今度都表ヨリ  
 訓導安俊卿ヲ刑戮スル  
 ノ令頗ル嚴急ナリ其累  
 在守ニ及ハスト虽此今  
 若シ俊卿ノ處断ヲ聞カ  
 ハ在守ノ逃匿料ル可ラス  
 之ヲ縛シテ他日ノ裁下  
 ラ

外務省

待ツニハシカスト既ニ之  
 ヲ梁山ニ得タリ然ルニ  
 在守其自ラ免ル可ラサル  
 ヲ固リ曾テ所蓄ノ毒藥  
 ヲ服シ自死ヲ計ルニ獄吏  
 其状ヲ察シ之ヲ府使ニ  
 報ス府使直ニ解毒劑ヲ與  
 ハテ之ヲ救ハシムルニ  
 漸ク一命全キヲ得タリ而  
 メ言語不通身體異常ノ  
 者ニ似タリ不知其爽快ヲ  
 得ルヤ否故ニ府使頗ル  
 心勞事由ヲ都表ニ内啓シ  
 テ裁命ヲ仰クト巷説ニ  
 新訓導ノ下末近キニアル  
 ヘシ又一説ニ昨秋入館  
 ノ按察一行及ヒ内裨將南  
 孝源モ共ニ下末ス此輩  
 ノ末ル旧因縁ヲ以テ修好  
 順理ノ為ナリト又曰ク  
 輕々日本人ニ接シ國事ヲ  
 誤ルノ罪ヲ犯スナリト  
 其説區々トシテ真偽判ス  
 ヘカラス然レモ訓導ノ  
 下末必ス近キニアラント  
 云右福珠ノ言ニ就テ考

フルニ兩三日以來旧府使旧訓導斬獲云々ノ說朝  
夕變化アリト虽モ今稍一轍ニ歸スルカ如シ而ノ  
在守ノ或ハ繫獄或ハ毒劑等ニ至リ又更ニ疑懼ス  
可キアリ人ヲ眩惑操弄スルハ韓奴ノ常態ニノ其  
現跡ヲ認ムルニアラサルヨリハ輕信ス可ラス又  
退テ惟フニ今俊卿在守ノ一身ニ於ケル兩國交絶  
機関ノ一大干係ナルハ嚮ニ遑与スル我書契謄本  
ニテモ既ニ詳明スヘシ而テ新訓導上京事ヲ奏ス  
ルニ方リ遽然トノ之ヲ斬リ之ヲ縛スト言モノハ  
所謂黜罰抵法否ノ答辭ニ充レカ為カ然ラハ其斬  
獲ノ真偽ヲ問ハス我ト款好ノ意ヲ表スルニ似タ  
リ若夫極メテ我ヲ擯斥セントナラハ既ニ放免セ  
シモノヲ捕テ再々此極刑ニ處スルノ理ナキカ如

外務省

シ訓導下未ニ至ラハ事必ス判然タラン  
別差曾テ病氣ト稱シ入館セズ是恐ラクハ辭柄ナ  
ラント察シ浦瀨ヲシテ訊セシムルニ彼レ稍愧ル  
意アリテ即チ病氣少快ヲ得タリト云テ任所ニ下  
ル因テ其内情ヲ窺ハン為メ試ニ入館ヲ促サシム  
同二十日陰<sup>五十九度</sup>別差入館山之城浦瀨住永列坐  
應接我レ曰ク過日投送セシ漂民受取書ハ昨秋所  
約東萊府使ノ領受書ヲ送致セラルヘキニ今ニ延  
引早々差出サル可シ彼云ク訓導モ不遠京ヨリ飯  
リ來ルヘキニ付夫マテ遽延ヲ願フノ意ヲ府使ヨ  
リ傳ヘラレタリト我曰ク水直船<sup>夜高ヲ禁スルハ</sup>  
昨秋館長ヨリ撤却スヘキ示談ニ及ハレシ所以ハ  
他ナシ兩國修交將ニ開ケントスル時ニ當リテハ

互ニ禮信ヲ表ス可シ而テ直船ヲ設ルハ是疑ヲ蓄  
テ人ヲ待テ其挙動ヲ偵フニ似テ交際ノ礼貌ニ於  
テ甚タ闕如タリ故ニ十月廿四日ノ夜ヨリ撤却ス  
ヘキ旨府使ノ意ヲ以テ訓導ヨリ答及セリ而テ又  
十二月ニ至リ設置如故因テ前言ノ虚ニ属スルヲ  
責ルニ訓導回答シテ云ク使道其実ヲ查スルニ果  
シテ奸徒ノ所為ニ係ルニ後嚴筋ヲ加フ又無弊ト  
然ルニ頃日ニ至リ又如故は何等ノソマ速ニ撤  
却ス可シ然ラサレハ我ニ於テ奸徒ノ所為ト見認  
ノ其處分ヲナス可シ彼云ク至當ノ議喙ヲ容ル  
ナレ但番船ノ設ケ潜高ヲ禁スルノミニ非ス又館  
内ヲ偵フニ非ス只我カ夜高ノ輩若館傍ニ於テ紛  
擾ノ一モアラシカト府使ヨリ預防セシモノナレ

外務省

氏今聞ク所ノ如キハ實ニ不都合ノ義ニ付直ニ府  
使ニ申出テ撤却ノ計ラヒヨ為ス可シ我云ク旧府  
使鄭頭徳旧訓導安俊卿及崔在守等ヲ斬戮セシ説  
アリ其實否如何彼云ク旧府使ハ都府ニ於テ已ニ  
刑セラレタルヲ兼レ氏未タ公文無之依テ確答  
ナシ難シ旧訓導ハ國家ヲ欺罔スル罪輕カラサル  
ヲ以テ東萊ニ於テ已ニ梟示セラレタリ且崔在守  
モ東萊ニ捕ハルノ際自ラ毒ヲ服セリトノ説アリ  
最早殞命セシカト思ハル新訓導ハ必ラス本月  
中下萊ノ積リナリ  
本日本省ヨリ第一第二ノ公信ヲ接收ス木戸板垣  
兩氏參議ニ復任セリト云フ又清帝崩殂ノ報アリ  
左ニ

清國同治帝崩殂同帝ノ叔父醇親王奕譞ノ子載  
湣四歲年帝位ニ即キ光緒ト改元シ同治ヲ謚シテ  
穆宗毅皇帝トシ慈禧安兩太后同治帝正嫡並簾聽政  
新帝即位ノ義ニ付朝鮮ヘモ報告ノ勅使ヲ差出  
ス可シト云フ

本日渡来ノ船隻ヨリ曾テ照會スル所ノ航海公證  
ヲ施行ス故ニ其旨ヲ通事ニ達セシムルニ敢テ異  
議アルヲナシ

飛船ヲ命シテ本日別差接話ノ次第旧府使旧訓導  
崔在守等ノ屢浙及ヒ新訓導迄日下未云々ヲ本省  
ニ報シ且此公信ノ延滞センヲ恐レテ別ニ暗號  
ノ電報ヲ作り之ヲ馬関電信局ニ送致シテ本省ニ  
急報セシム其案左ニ

外務省

旧訓導斬ラレタリ在守獄ニ下ルト届ケ出タリ

同廿一日晴五十九度

同廿二日晴五十八度長崎縣ニ依頼シテ書ヲ在上海

品川領事ニ致シ向後上海發兌ノ新聞ニ糧月々兩回遞  
送ノ義ヲ依頼ス

同廿三日晴五十八度

同廿四日晴五十九度

同廿五日晴五十九度福珠云ク在守ヲ斬ニ處ス可キ

旨東萊ニ命令アリ訓導下着セハ必ラス處刑ス可  
シ

同廿六日陰五十七度夜直船撤却ノ回答ヲ促スカ為

メ別差入館ヲ達スルニ金福珠別差ノ意ヲ兼テ未  
リ云ク訓導モ明日カ明後日ニハ必ラス到着スハ

キニ付其節議ヲ盡シテ確答ス可シ暫猶豫アラシ  
 一ヲ乞フ  
 同廿七日晴五十二度  
 同廿八日晴五十五度金福珠來リ浦瀬ニ詣テ云訓導  
 ハ既ニ大丘ニ着セリト聞ケリ東萊人ノ話ニ公幹  
 頗ル順ヲ得訓導意氣揚々タリト依テ浦瀬ヨリ着  
 有次第直ニ入館ス可キ旨ヲ達ス  
 同廿九日晴五十四度別差ニ入館ス。ハキ旨達セシ所  
 返書ニ訓導本月晦日若クハ来月初旬ニハ着ス可  
 キ旨答へ来ル本月廿八日ナリ  
 同三十日晴五十五度  
 五月一日晴五十七度本省へノ公信ヲ裁ス訓導未タ  
 着セス其他近況ヲ報シ併テ副官再渡ヲ企望スル  
 外務省  
 ノ意ヲ致ス且四月廿五日ヨリ新港海公證ヲ施行  
 シ乃チ彼レニ照會ヲ遂ケ及ヒ本公信ヨリ番号ヲ  
 附シテ順遊ス可シ等ノ一ヲ掲ク  
 副官一行四月七日馬関ヲ發シ八日神戸着十三日  
 東行ノ郵船ニ便シ上東ストノ傳聞ヲ得タリ  
 同二日晴五十七度昨日裁スル第一号第二号公信ヲ  
 本日出帆ノ便船ニ付シテ發ス  
 彼レノ國情ヲ秘スルハ獨リ在官ノ者ノミナラス  
 槍父野人モ亦皆然リ而シテ其載籍ノ如キ尤モ他國  
 ニ傳播スルヲ禁ス故ニ詩章文類ニ至テモ猶之ヲ  
 購求スル丁甚タ難シ況ンヤ典憲兵政ニ係ル書ニ  
 於テヤ昔年宗氏偶々經國大典ヲ收メ得タリ此  
 書成化己酉年間乃チ我延徳元年ノ編輯ニシテ今

ヲ距ル元ノ三百八十七年迄後逐次纂補シテ續大典ト云ヒ又大典通編ト云ヒ終ニ大典會通ト云フ此書アルヲ聞クヤ久シ而ノ未タ一目瀏視スルヲ能ハス然ルニ昨秋森山茂駐館ノ際漸ク之ヲ得ルノ道ヲ得若于貨ヲ投シテ窺カニ之ヲ謄寫セシム頃口寫了リテ持来レリ此書ヤ同治四年即チ我慶應元年ノ編成ニ係ル今ヲ距ル十有一年トス此則現ニ行ハル、所ノ國典ニシテ編者ノ總裁李裕元ハ當今領議政タリ金炳學ハ左議政タリ纂輯朴珪壽ハ右議政トス今又兵學指南ノ一書ヲ得タリ謄寫セシム亦是彼レノ秘スル處他日校合ヲ了レハ本省ニ呈セントス

同三日晴 五十七度 六十二度

外務省

同四日晴 五十七度 六十二度

同五日晴 五十七度 六十三度 訓導ヨリ浦瀨書記生ハ差府ノ事ヲ告ル書ヲ致ス左ニ

春風多厲 啓居清裕朔款々々僕間閑數千餘里終得還來云路億顏唐莫能拝懃憐奈何亦即握叙云數日休憊然後可能振作故先此相探都留面悉不宜暫上

乙亥三月廿九日 訓導 印

全福珠浦瀨ニ語スルニ今日本ノ尋交事宜ヲ講スルニ其禮節書式ノ如キ務メテ新例ヲ擬メントスルニ似タリ其如此ハ則隣誼ノ情ニ於テ如何及令ハ旧例三分ヲ留メテ新式七分ヲ加フレハ新旧宜キヲ得テ善隣ノ意モ始メテ達ス可シ其書契圖文

ヲ用フル如キ我ニ於テ解ス可ラス因テ之ヲ受ル  
ノ理ナシ又服制ニ至テハ我邦疑訝ヲ容ル、一甚  
シ故ニ是等ノ一暫ク回ニ依リ我情ヲ安ニスル  
ニ非レハ隔意アルニ似タリ東萊府使面晤ノ一ハ  
朝令アル由ナレハ面議ノ上果シテ新旧互キヲ得  
ルノ論ニ涉ル可シ然リト雖モ其前新服ヲ用ヒラ  
ル、時ハ所シテ許接セスト云是福珠ノ内話ニ係  
ルト云ト雖モ恐テクハ訓導ヨリ、訊セシムル處ニ  
シテ則チ我内情如何ヲ窺ハシムルモノナラシカ  
故ニ我ニ於テハ敢テ彼カ動止ニ関セス只副官再  
渡ヲ俟ツノ状ヲ示スノミ

同六月陰雨六十三度 六十二度前月廿日發スル所ノ電報同廿  
四日午前十時馬関電信局ニ達シ即日午後三時

外務省

東京ニ達セシ旨同局ヨリ報知アリ

同七日陰風六十三度 六十四度

同八日晴六十一度 六十三度過ル五日訓導致スル書ニ數日

中ニ入館スヘキノ意アリ而テ今猶未ラス依テ浦  
瀬ヲレテ試ニ其情ヲ問ハシムルノ左ノ如シ

昔者兼惠書千里無恙歸頓云公私之幸欣忭曷已  
而示意貴國之所謂數日者將二日之謂乎抑指三  
日乎曠日至今太屬怪異請不用模糊明載日時斯  
速回告仍照會焉

書記通事金哲仁陪通事金福珠浦瀬ノ舎ニ未リ云  
ク訓導昨夕任所ニ下レリ速ニ入館面晤ヲ遂ク可  
キノ処聊内情ヲ陳シタキニヨリ任所マテ過訪ア  
ラレマシクヤト浦瀬ヨリ公事ハ私謁ヲ須井スト

答フ依テ彼レ云ク然ラハ吾儕ヨリ試ニ陳言セン  
 訓導ノ言ニ皇勅ノ文字ハ貴國ノ自稱我ヨリ議ス  
 ハキニ非スト至我朝之レカ為ニ議論ナキニア  
 ラス願クハ解疑ノ為メ我國ノ稱謂ハ天下萬國推  
 認スル所ト雖モ貴國返翰中此文字ナキモ強迫ヲ  
 用ヒス又書契國文ヲ以テスル我式法ニシテ且維  
 新以來萬國ニ衡行スル所ナリ云々ヲ記シテ下官  
 ニ投与アルニ於テハ下官速ニ之ヲ上陳スヘキニ  
 ヨリ隨テ我朝疑ヲ解キ書契領受ノ地ニモ至ルヘ  
 ク且又書契ハ漢譯ニ押印シテ通典アラハ此上ノ  
 便方ナリ而テ我復書ニ光緒ノ年号ヲ加フル片ハ  
 如何浦瀨云ク解疑ノ一ハ既ニ昨秋ニ尽セリ且光  
 緒云々ハ貴國內政ノ事ナリ固ヨリ我ニ問フヘキ  
 外務省  
 ニ非ス哲仁云ク府使接待モ近日ニアル可シ浦瀨  
 曰ク東萊ノ前往ノ件ハ如何貴國ニテハ我理事官  
 一行入府セハ留滯數月供億不費ナルヲ願慮スヘ  
 ケレモ決シテ然ラス只六七人負整肅ヲ主トシ我  
 書契ヲ府使ニ致シ返翰接受ノ期ト專使派發ノ期  
 トヲ約シテ館ニ退キ其期ニ至テ再ヒ入府之ヲ願  
 シテ帰國スルノミ亦易簡ナラスヤ哲仁云ク入府  
 ノ上ナラテハ書契通与セラレサルカ竊カニ惟フ  
 ニ館内西館ノ西大廳京氏ノ將送使ニ府使来リ蒞  
 テ通交セラレテハ如何浦瀨曰ク是等ノ事汝輩ト  
 敢テ議ス可キニ非サレハ速ニ訓導ノ入館ヲ促ス  
 ヘシ云ク然リ但兩國重大ノ事互ニ情義ヲ述ヘ其  
 至當ヲ要スルナレハ訓導ニモ今日正官公ニ面晤



ノ際正坐ニテハ嚴格ニテ真情投合ノ難キヲ以テ  
先ツ我儕ヲシテ之ヲ告ケシム公宜シク傍ヲヨリ  
調處セラレシテ請フト言テ退ク

午前十二時訓導入館先浦瀬ノ寓ニ就ク其情ヲ述  
テ云ク昨秋来ノ晤談及ヒ書類一切既ニ具狀啓聞  
為シ置シニ尔後人アリテ館中ノ近況旧ニ異ナル  
狀ヲ以聞セシヨリ朝廷信疑相半ハスルノ際理事  
官渡海ノ一及ヒ書契謄本ヲ併セテ啓セシニ其國  
文ヲ見テ果シテ疑怪ヲ生シ小官上京昨秋ヨリ前  
日マテ公幹ノ節次ヲ詳陳スレド信セラレス然ル  
所以ノモノハ無他擔當宜カセシ大臣今ハ世ニ無  
キ人ノ如ク兩國ノ事務總テ此人ノ手ニ流滯隱没  
シ更ニ朝廷ニ貫徹セス殆ト從前ノ形行ニ退歩シ

外務省

小官ノ盡カ水泡ニ屬スルノミナラス身ニ譴責ヲ  
招クモ計リ難シ如何トナレハ皇勅ノ文字アル書  
契ハ清國ニ寄シ之ヲ畏避セサルヲ得サレハ到底  
受難キ一也大日本ノ大字モ清國ニ事大ト称ス  
ルヲ以テノ故ニ障碍アル一也國文ヲ本書トセ  
ラルハ疑訝ニ屬シテ後日ノ惑ヲ免レサル一也  
也服製旧ノ如クナラサレハ許接ス可ラス也廷  
議紛紜小官之ヲ辨明上陳シテ云ク皇勅ハ彼國ノ  
自称ニシテ我ニ遵奉ヒシメントノ一ニ非ス殊ニ  
我使節ハ國書ヲ齎ラスニ及ハス只外務卿ト禮曹  
判書トノ往復ニテ事成リ服飾ハ他國ノ制度我ノ  
教テ喙ヲ容ルヘキニ非ス書契モ其國文ニシテ例  
ニ依ルナレハ亦教テ間然スヘキニ非スト反復辨

明スルニヨリ稍疑フ解ト雖凡到底皇勅ノ文字ヲ  
除キ服制モ旧ニ依リ漢文ニ押印シ我カ難ニスル  
所ヲ避ケ安クスル所ニ執テコソ款好ノ意ニ適ハ  
順便ノ一端ナラントノ議既ニ府使ニ達シタレハ  
府使ヨリ論及スヘク因テ汝速ニ任所ニ下ル可シ  
トノ命ヲ奉シテ帰府セリ我政府ノ議定已ニ如是  
故ニ府使ノ宴廳接遇モ逆キニアル可シト雖凡主  
トスル所旧議旧式ニアレハ貴官等新服ヲ着ケ中  
門出入シ屬官椅子ニ倚ル等ノナレハ議整ハ難  
シ事ノ此ニ至ル唯貴官等ノ曲從如何ニアルノミ  
若シ曲從セサレハ府使面會ハ勿論順便ノ緒モ絶  
ハ任官ノ職ニ堪ヘス罰典ノ此身ニ及フマ必セリ  
依テ下官苦慮ノ餘一ノ情願アリ願クハ貴官等今

外務省

我朝廷疑難ノ件々逐條辨解シ且昨款已ニ汝ハ議  
談セリ云々ヲモ併テ之ヲ筆シ以テ下附セラレタ  
シ下官之ヲ得テ轉啓セハ一ハ下官中保ノ失錯ニ  
非ルヲ證シ一ハ朝廷疑團氷解ハ一端トナラシ  
テ早晚講定官カ何官カ未テ面接ス可シトノ聞ハ  
モアレハ又其時ノ一助トモナリヌヘシト云因茲  
之ヲ見レハ通事輩向ニ告ル所ト對照シ及復操弄  
取レカ是ナルヲ知ル可ラス因テ言ハシメテ曰ク  
副官再航迹ニアリ共議ニ付シテ可ナリ故ニ朝意  
ノ在ル所府使ノ書札ヲ以テ答フ可シト乃今面議  
ヲ避ク而メ住永辰安ヲシテ哲仁ヲ要シ汝今朝浦  
瀨ニ告ル言ト訓導今自ラ語ル所ト何ソ意旨ノ相  
及スルト如是ナルヤ浦瀨頗ル疑ヒ且ツ膜レリト

詰ラシム哲仁云ク小官歳古稀ニ近ク西國ニ仕彼  
スル数十年未タ曾テ背面齟齬ノ語ヲ為サズ今朝  
ノ言背真話ナリ但訓導ノ言辞婉曲ニ過キ事ノ易  
キモ之カ為ニ難キニ致スモノ不少ト歎息シテ去  
ル金哲仁ナルモノハ固ニ篤実ノ聞ヘアリテ能我  
情ニ通知シ訓導ヲ辨解スル等ノ一多クハ此者ノ  
盡ス所ニ成ル而テ今日ノ一甚タ疑フ可シ料ルニ  
是訓導我緩急声息ヲ試ミンカ為。ノ言ニ出テ、所  
謂情態無常眩惑難測ノ故智ヲ用ビシモノナラン  
カ

同九月陰六十一度昨五十八度日金哲仁ノ語支梧アルヲ以テ

又浦瀨ヨリ之ヲ詰問セシニ哲仁言フ所昨日住永  
ニ答ヘタルニ同シ且ツ曰ク下官思フニ貴國ノ服

外務省

制何ソ我ヨリ可否ス可ンヤ宴廳中門ヲ出入スル  
素ヨリ其所ナリ従前ノ使貪ト品級自ラ異ナレハ  
ナリ而座中ノ位置ハ主權ニ付シテ可ナラン皇勅  
ノ文字及ヒ國文書契ノ解疑等ハ府使面晤ノ上之  
ヲ正官ニ乞ヒ従テ書契典受ノ一モ講定ニ及フ可  
シ訓導ハ飾辞巧言ヲ是トスルヨリ如是紛紜ヲ未  
ス實ニ歎ス可シ今朝訓導書ヲ裁シテ昨日達セラ  
ル、所ノ傳令ヲ府使ニ乞ハレタリト言テ歸ル  
哲仁又未リ浦瀨ニ告テ曰ク訓導昨日退館ノ後深  
ク考ヘ圖ヲ改メ更ニ理事官公ニ面議ヲ乞ハン為  
メ即チ就館ス可シ宜シク許接セシメラレヨ訓導  
己ニ守門ニ未ルト因テ之ヲ公館ニ誘列シ先ツ浦  
瀨等ヲシテ接セシム訓導曰昨日ノ示意ニ隨ヒ府

使相接儀節ニ付協辦ノ件々即チ書ヲ馳セテ傳令  
ヲ請ヒシニ則チ昨日述ル所ノ如ク服制変更正門  
出入其他三件皆旧式ニ違フヲ以テ許接ス可ラサ  
ルノ教意ナリ然リト雖モ館中ニ議レ彼五件中何  
件カ旧ニ依テ奉行ス可シトナラハ又府使ニ回稟  
シテ協辦ス可シト即チ其旨ヲ假リニ書シテ面議  
ヲ乞フ又別ニ左ノ書ヲ草シテ問議セントスルノ  
意アリ訓導中座ノ問書記生察カニ之ヲ謄寫シテ  
彼カ意向ヲ告ク而シテ理事官面晤中彼レ終ニ此  
書ヲ出サスシテ止ム但シ書中大日本大字モ亦昨  
年書示セシトアルハ謬ナリ

外務省

貴書契中皇字大字即貴國之稱而我書契中此文  
字有無不可強迫且信使時互無國書只以我國禮  
曹之於貴國外務省書契往復而已事已有昨年書  
示然請更示解意事書契之真謄渾書雖貴國文法  
然我國有所未解則不可不以真書往來事  
時已ニ午後七時ナリ此時正官出席訓導云ク小官  
頃日帰存セリ我朝府使ニ命シテ宴廳ニ相接セシ  
ム故ニ今日是等ヲ報セシ為メ拝晤ヲ請ヘリ相接  
ニ付テハ協議書則チ清鑿ニ備フト云テ左ノ書ヲ  
出セリ

使道 教意内相接時儀節中 客使之衣服変更  
正門出入本官迎接坐席相近属官交椅坐俱是無  
例則唯當依例設行矣故茲以書陳 俯諒焉

乙亥四月初五日

訓導玄普運 印

理事官 尊公

正官讀了テ曰ク此教意ニ違フアラハ迎接セサルトノナリヤ云ク必シモ然ラス曰然リト雖モ衣服変改ハ無例トアリ貴國何等ノ権カアリテ我制度上ニ干預シテ如是論及セラル、ヤ云ク我國権ヲ以テ之ヲ異難スルニ非ス只貴國ノ旧服ハ古未我邦ク稱譽スル所而メ新服ハ其製聊カ他國ニ似タルヲ以テノ故ニ願クハ旧ニ異ナラサルヲ欲スルノ厚意ヨリ斯ク陳言セルナリ曰ク我服制改革ノ件ハ容秋既ニ因式ノ書ヲ示シテ辨明セリ豈料ニヤ今日又如是説ヲ聞ントハ古人言ル「アリ利身謂之服、便事謂之禮」ト天下萬國豈創建以來ノ服製ヲ守テ今猶少變セサルモノアラシヤ貴國モ亦必ス幾分ノ沿革アルハシ且ツ尔後貴國使臣ノ

外務省

我邦へ来ラシニ其笠室外ニ戴ク可ラス其袖ハ長シ皆我邦ノ嫌存スル処ノモノナレハ之ヲ截リ之ヲ脱シテコソ兩情款好ノ地ニ至ルヘシト論議スル「アラハ貴國人之ニ其従セラル、ヤ尔後令貴國人之ニ其従スル」アルモ我邦テハ決シテ是議ヲ為サ、ルナリ曾テ聞ク清ノ明ヲ亡シテ國ヲ建テ餘威貴國ニ及フ然レモ貴國ニテ清人ノ服制旧明人ニ違フト言テ擯存セシ「ヲ聞カス貴國自ラ及省シテ悟ル可シ對テ云ク敢テ其製ノ復旧ヲ願フニ非ス唯我国情ノ安シセサル所アルヲ以テナリ曰ク服製ヲ論議スルハ即チ我國制ニ干預スルナリ且又無例トアルハ何等ノ例ヲ指テ其有無ヲ論セラルカ宗氏ノ旧例中ト雖モ後年我改服ノ舉ア

ルモ必ラス旧ニ依ル可シトノ明言ナシ故ニ断然  
不許接ハ其旨確答アル可シ又正門出入ノ一ヲ拒  
ムハ是本官ヲ藩屏ノ陪臣ト同視セラルカ云ク  
敢テ不許接ナド、断然放言スルハ小官ハ勿論府  
使ト雖氏亦能ハサル所ナリ只我朝廷ノ命ヲ以テ  
府使ノ傳令ニ依テ斯ク陳セシナリ必スシモ藩臣  
ト同視スルニ非ス未ダ新例講定ニ及ハサル一ナ  
レバ願クハ旧ニ依ラン一ヲ懇願セルナリ曰然ラ  
ハ今旧對馬州守ナル外務大丞親シク渡航セハ何  
レノ門ヨリ出入スルヤ又足下常ニ屬吏ヲ俱シテ  
此館ニ来ルヤ足下ハ本玄關屬吏ハ脇玄關ヨリ升  
降ス而ルニ今之ニ及シテ脇玄關ヨリ升降スヘシ  
ト云クハ足下甘シテ從フヤ仮令足下甘從スル

外務省

モ我カ賓主ノ礼ニ於ル必ス足下ヲ屈シテ脇玄關  
ヨリ通行セシムル一ヲ為サザルナリ云ク大丞ト  
云ヒ閣下ト云ヒ何ゾ高卑ノ別アラニヤ而テ其餘  
ノ條目ハ如何曰ク餘ハ皆小節目唯貴國ノ隨意旋  
行ニ任ス然リト雖モ兩國ノ情好ヲ合スハ重事ナ  
リ故ニ昨殊既ニ此照會アリト尋交取扱書中因使  
臣之階級自有恩榮典受之差等不准此厚被薄耳ノ  
文ヲ摘出シテ示ス訓導云ク貴价ヲ薄待スルノ意  
ハ毫モコレナシ願クハ後日ノ為メ只今ノ高諭ヲ  
筆シテ給セラレヨ曰ク諾之ヲ給スルニ於テハ府  
使ヨリモ亦書ヲ以テ答ハラル可シ是主客ノ對礼  
ナリ向ニ副官上京ノ特別差ニ投セシ口陳書ハ定  
テ熟讀セラレシナラン貴國屢次背約反信甚々謂

レナシ副官廟謨ヲ奉シテ再渡迄キニアリ其命ニ  
 ヨリテハ直ニ東萊ニ發向スルモ計リ難シ委曲其  
 時ニ面ス可シト思ヒシニ足下ノ懇請黙止難キヲ  
 以テ今日接晤ニ及ヘリ東萊迎接ノ議ハ如何云ク  
 書契接受ノ式ハ府使宴廳ニ於テ行フト思ヘリ  
 曰ク昨秋第ニ件ニ決スル云々ノ約ハ即チ確然貴  
 政府ノ命意ニアラスヤ未タ貴政府ノ廢亡ヲ聞カ  
 ガレハ此約ノ廢ス可ラガルハ勿論ナリ然ルニ今  
 宴廳ニ於テ迎接云々何ノ言ツヤ云ク其約スル所  
 我朝ノ命意ト雖モ必ス東萊ニ於テ迎接スヘシト  
 答ヘサルナリ曰ク然ラハ一時閃弄シテ他國ノ使  
 員ヲ欺キレナリ云ク全ク然ルニ非ス東萊ニ於テ  
 接受ノ議未タ決セサルナリ然ラハ過日ノ上京何

外務省

ノ為ナルマ云ク一タニ盡シ難シ曰ク約ヲ履ムハ  
 兩國ノ信之レヲ履ムノ道ヲ尽スハ使員ノ本分ナ  
 リ若シ我ヨリ迫テ入府セハ我ハ信ニ伏ルト雖モ  
 貴國其國威ヲ墜カント酌慮シ今日マテモ之ヲ強  
 待ヒシニ豈圖ンヤ足下猶之レヲ曖昧ニ付セシト  
 スルカ云ク此論ハ容易ナラス之ヲ他日ニ譲リ今  
 請求セシ使道教意ノ答書ヲ給ハリタシ且又皇字  
 ト大日本ノ大字ノ解疑及ヒ我信使ハ國書ヲ帶ル  
 ニ非ス只礼曹判書ト外務卿ノ往復ニテ事成ル云  
 ヲ昨秋己ニ示教ヲ蒙ルト雖モ願クハ猶之ヲ書シ  
 テ併セテ給ハラント曰前日府使ト面晤ニ及ハ  
 、是等一切ノ書類ヲ再ヒ手授セント整頓セルヲ  
 己ニ欠シ我ニ於テハ前言後言毫モ支吾ナキナリ

云々大日本ノ大字ハ我邦清國ニ對シテ嫌ヒアリ猶  
 認メハル可ラサルカ希クハ旧來ノ稱謂ニ依リタ  
 シ曰決シテ清國ニ與関ナシ此使清日記ヲ見ヨト  
 我々柳原氏總理衙門ニ朝鮮屬否ヲ照會ニ及ヒシ  
 書ヲ示ス且曰我大日本ト稱ルハ他國ノ故ラニ大  
 字ヲ冠ラスル自大ノ尊稱ト異ナリ其辨解ハ壬申  
 中及ニ既ニ此書彼ニ投シ置タル以テ貴國ニ辨及ニ  
解疑書ナリタル答ナリトテ其寫  
 ヲ示シ加之昨秋辨明ノ未深民送受ノ小例ヲ設ケ  
 奔使ヨリ館長ニ答ナル書式ニモ之ヲ掲載スハキ  
 ヲ足下ト議約セリ足下忘レタリヤ况ヤ日本トノ  
 ミニテハ朝鮮ノ朝字ヲ省キテ鮮國ト言フニ近シ大  
 日本ハ邦訓耶麻土ナリ耶麻土即チ大和ニシテ人

外務省

皇ノ太祖 神武天皇ノ都スル所終ニ以テ國号ト  
 セリ貴國ノ中世分裂シテ三韓ト稱スレト今復古  
 シテ旧名ヲ稱スルカ如シ貴國ハ五ト云我ハ皇ト  
 稱スルニ依テ又貴國ノ疑慮ヲ容ルヨシ是亦所謂  
 杞憂ニモテ弱肉強食ハ今日文明世界ニハ更ニ有  
 ル可キ理ナシ宗氏ヨリ曾テ貴國ニ陳賀ノ書中ニ  
 國王殿下ト書シ貴國返翰ニ我聖上特旨等ノ明文  
 アリ聖上皇尚何ノ差アラシク而テ此文ニ據テ宗氏  
 フ認メテ臣屬ト做スカ云々遂次ノ密示ニテ群疑稍氷  
 解ニ至レリ而シテ這般信使簡派ニ至ラハ國書ニ不及  
 一ナラニ曰ク大丞書契ノ返書ハ本官携歸ル可シ卿  
 公ノ返書ハ貴國全權使臣齎シテ渡海アル可シ議  
 此ニ至テ訓導莞尔トシテ頗フル解悟ノ色有リ然レ



臣獨り我服制ニ至テハ彼レ未タ安ニセサル所ア  
 ルニ似タリ故ニ云ク貴国人新服ニテ徃来スルニ  
 於テハ外国人ノ混シ至ルモ我邦之ヲ諦視スルコ  
 能ハサルヨリ他日或ハ恐ル其弊害ヲ聞クアラ  
 ンヲ曰ク貴国其思レアラハ我亦注意ス可シ然レ  
 臣服制ノコトハ到底曲從スルノ理ナシト是ニ於テ  
 國文書契ハ萬國通行ノ通例ナルヲ示シ就中日清  
 條約文書ノ国文ニ漢譯ヲ添テ互換スル等ノコトヲ  
 懇ニ説示シ即使道敷意ノ辨駁書ヲ示ス其書左ニ  
 一使道敷意内相接儀節中容使之衣服更改是無  
 例云云夫制度文物隨時制宜今日用之明日廢  
 之唯是為主之推典章之所在何容他國之議  
 若及于此于預侵越莫甚焉交際成於礼敬我邦  
 不服是服則無以成礼敬 貴國亦安取之  
 一正門出入云云本官則大日本國之派員非昔日  
 對馬州守陪臣之比州守之書契猶出入正門州  
 守現任外務大丞大丞親來則持自何門而出入  
 本官則為少丞其所職所掌彼是何差回應崇其  
 礼遇盖崇其礼遇者非獨崇敬使員乃所以崇敬  
 友邦也所以崇敬友邦者則所以崇敬自國也  
 此二項我邦名分之所關非止本官一身之榮辱  
 故斷不可聽許書中依例云云援何等之例而言  
 之係貴國制定ヲ將係對馬州主僧守之旧例乎  
 綱領未立何例之有若夫府使迎接坐席相近屬  
 官交椅是等固小節目耳不必強辯但坐席太遠  
 迎接太簡則情意不洽所宜接主之注意也

外務省

右所述言簡而事非輕故以東萊府使口陳書趁  
速明答焉

明治八年五月 大日本國理事官森山茂 印

訓導讀了テ後是ヲ投與セラレシヲ請フ曰ク可  
ナリ只議事非輕故ニ府使書札及ヒ傳令ヲ以テ答  
ヘラレヨ即チ以テ後日解紛ノ地ヲ為サンナリ今  
試ニ足下ノ為ニ忠告スヘキモノアリ蓋シ西間ニ  
立テ公事ニ奔走スル者一事一言粗忽アル可ラス  
且ツ事ノ成不成ハ自ラ其躬ニ及求セバ明ラカナ  
リ己レノ曲從シ難キヲ以テ他人ニ強ヒ其容易  
ナルコトモ一タヒハ之ヲ拒ム是貴國ノ他人ヲ辱  
スルナリ然リト雖臣我ハ所約アルヲ以テ信義ニ  
憑仗シ以テ來ルナレハ其曲直履反天下俱ニ視ル

外務省

所昨年我邦征蕃ノ舉アリ既ニ清國ト破和ノ勢ヲ  
為ス而ノ談判ノ結局五十萬兩ノ償ヲ我ニ致シテ  
結果ヲナス條理ノ歸スル所決シテ強ユヘカラス  
百事副官再航ヲ待テ面議ス可シ猶深ク事勢ヲ省  
ミ語次婉曲ナク誠信ヲ肯トセラル可シ云ク諾此  
ニ於テ答辨書ハ明日淨書シテ投ス可シト約シテ去ル  
同十日陰<sup>五十五度</sup>午<sup>五十七度</sup>前十二時書記通事金哲仁訓導  
委代ノ旨ヲ以テ浦瀨書記生ノ舍ニ就テ答辨書ヲ  
請フ即チ之ヲ適ス哲仁云ク理事官公昨日ノ論ノ  
如ク大日本ノ大字及ヒ我信使他日携帶ノ書契ハ  
國書ニ及ハス禮曹判書ヨリ外務卿ヘノ回翰ノミ  
ニテ可ナリトノ意ヲ書シテ給ハラハ速ニ工奏ス  
ルニ便ヲ得ヘシ且府使ニ回報スルニモ信ヲ取ル

ニ足ヲ以テ甚ク冀望スレドモ若シ叶ハサレハ貴下  
ノ書ニテモ給ハラズヤ浦瀨曰ク公幹順成ノ目途  
ヲ立テ、諸フトキハ必ラス正官公ヨリ書給セラ  
ルヘシト雖モ徒請得カタシ然ル所以ノモノ何ソ  
ヤ貴政府ノ疑團昨秋已ニ氷解ニ至レルヲ以テ再  
ビセサルナリ然レド僕ヨリ之ヲ書シテ給スル豈  
難カラシヤト云テ浦瀨ヨリ左ノ文ヲ述ス

公之 諸意具詳悉夫我之 大日本者是即古来  
之称号又曰大和邦訓共謂耶麻土大和州者人皇之太  
祖 神武天皇所都故以為國號盖非他國之故加  
大字之類也此等之事予壬申年書契謄本併以錄  
示且昨秋閱示其寫本於 貴國官辦 公亦既所  
予知已而 貴國之 信使者即帶自 札曹判書

外務省

回覆於我 外務卿之書至 東京成尋書講新之  
誼可也 是係夜来 正官公之確議而使辨法實  
公所領諾豈容疑然而今又請書示者甚似蛇足雖  
然無違約無愆期以有所答於我 誠意亦無求而  
不得武是僕之固所擔當 公其諒之仍茲畧答

明治八年五月十日

訓導ヨリ返翰左ニ

此書ノ来ル十一日ニアリ  
此書ノ類ヲ以テ此ニ載ス

示意詳悉ス而シテ文短ニシテ未夕詳解ヲ盡サ  
ル処アリ追日面談ニ讓ル可シ禮曹判書ノ回  
答書契ノ事ハ昨日初テ承聞スル所ナレハ僕ノ  
適意ニ確答スル不能是亦告達スヘキ官ニ告達  
シテ後處分ヲ可待ナレハ預ノ領諾スルノ旨ハ  
申置カタシ

理事官公ノ口陳書ハ當サニ領受イタセリ不備

乙亥四月初六日

同十一日晴 五十二度 六十二度 九日應接ノ委曲ヲ輯録シテ公  
信ヲ發ス

同十二日陰 六十二度 六十五度 午後四時三十分副官廣津弘信  
及三等書記生真義制一行來着正官更ニ卿公ノ指  
令書ヲ奉受ス即卷首ニ掲ク此日副官再渡ノ故ヲ  
以テ訓導ニ就館ヲ達ス

同十三日雨 六十三度 六十六度 黄昏別差任所ニ下リ明間訓導  
モ來リ至ルノ旨届ケ出ツ其書左ニ  
夜來起居清福擊祝ニ、僕依劣而今日期於下去  
為計矣因 使道感候靡寧未及承 答教而日弊  
已暮矣當於明日奉叙為此暫上

外務省

乙亥四月初八日

訓導 印

同十四日晴 六十九度 六十七度 午後三時訓導別差就館先ツ真  
義制ヲシテ接セシムルニ訓導答議書ヲ出セリ然  
ルニ去ル十日我書給セシ所ノ辨駁書ハ固ヨリ府  
使ノ答議ヲ要スルモノニシテ訓導ノ代辨ヲ欲セ  
ス而ノ今其書訓導只府使ノ意向ヲ具セシ自己ノ  
口陳ナルヲ以テ之ヲ存ケテ不受明日猶入館アル  
ヘシト傳フ

同十五日晴 六十九度 六十七度 午前十一時訓導入館正副官應  
接訓導先ツ副官ニ向テ數千里往還ヲ慰勞ス正官  
曰ク昨日真書記生ヨリ傳承セシ件ハ四十年前  
ニ有ルヘキ談ニテ副官ニモ速カニ前約ヲ履行セ  
ヨトノ 朝命ヲ奉シテ再航セシ今日ノ話ニ非ラ

不且ツ我等府使ノ面接ヲ要スルハ固ヨリ案餉ノ  
未節ニ級ミタルアラス訓導云ク府使ニハ只旧  
式ニ依リテ接遇セヨトノ命ヲ得ラレシノミ而  
シテ五件ノ内ニ件ハ到底變通シ難シトノ貴意モ  
亦府使ニ轉申セシニ府使ヨリ再ヒ朝裁ヲ仰クヘ  
キ趣ナレハ其間猶曠待アラシクテ請フ正官曰ク  
再三延期曠日何ノ趣旨ナルヤ訓導云ク昨年差ニ  
行ノ答ヘアリト雖トモ直ニ入府トハ約セス然レ  
既前日ヨリノ話説ハ具ニ府使ニ陳述シ置タレハ  
面接ノ事整フニ至レハ公幹順成ノ端ニ就トイフ  
ヘシ固ヨリ享饗ノ為ノミニ非ス曰ク亦往事ヲ曠  
昧ニ付セントスルカト乃チ昨秋ノ約書ヲ出シ示  
ス彼云ク差ニ件云云ハ貴論ノ如シト雖モ議尚整

外務省

ハサルニ強テ東萊ニ前進アルモ府使面接ノ理ナ  
シ此重事ニ當リテハ任官ノ專断スヘカラサルハ  
勿論ニシテ只朝令ニ遵奉スルノ外他事ナシ副官  
曰ク訓導逐次言説了皆自ラ當然ノ議ト思ハルヤ  
云ク貴官ニハ不當然ト思ハルレモ朝令ナレハ是  
非ニ及ハス因テハ猶今一應朝裁ヲ仰カント欲ス  
ルノミ曰ク亦適辭ヲ用エルカ二月以來屢々托言シ  
テ延期ナレヒ府使面接ノ際ニ至リ又三日ヲ遅シ  
テ請ヒ其期ニ至ルニ及ンテ忽然一書ヲ遺シテ  
上京セリ実ニ反覆無信ト云フ可シ而ノ其書中我  
版制及ヒ百般ノ事一夕ヒ啓聞ヲ経レハ順便ニ帰  
ス可シ故ニ僕ノ帰報ヲ待テ敦好ヲ圖レハ豈美事  
ニ非スヤ云云トアルヲ以テ強恕以テ待ツ而ルニ

今聞ク所ノ如キハ是一時甘言以テ隣国ヲ欺キシ  
ナリ是ノ如クシテ亦當然ト思フカ且夫礼服ノ衰  
通ナラサルコトハ既ニ知リシ上ニ上京セラレタル  
ナリ然ルニ旧例ニ依テ面接セヨトノ命ヲ奉シテ  
来リ我持論ノ到底動カス可ラサルヲ知ルニ及テ  
再ヒ伺フトハ何等ノ言ヲヤ接ト不接トノ廟決ハ  
必ス承知アルヘシ云ク五條内三條ハ既ニ聴納セ  
ラレシコトモアレハ一應聴ニ觸レ弥蒙通ナラサル  
ニ於テハ猶朝裁ヲ仰クノ外ナシ曰ク其三箇條ハ  
畢竟浦瀨ヨリ談セシコト聞ク訓導二月以来ノ反  
覆無信更ニ将来ヲ証スルニ足ルモノナシ云ク皆  
實事ヲ陳言セシナリ但下官ノ自由ニテラ子ハ斯  
ク延滞ニ至ルト雖臣事ノ結末ニ至ラハ其善不善

外務省

ハ自ラ判スヘシ尚日子ノ徒費ハアリト雖臣今一  
應欺カルト思ヒ之ヲ待ニテ請フ曰ク欺カル、  
ト思ヒ之ヲ待テトハ何ソ輕蔑ノ甚シキヤ言前約  
ノ履背ニ及ハズ却テ議ヲ我制度上ニ加フ此ノ上  
ハ直ニ府使ニ面詢スルノ外ナシ云ク若シ強テ入  
府アルカ如キハ濫出ト見做スヘシ然ルトキハ不  
測ノ難モ亦計リカタシ曰ク我レ某府ニ抵ルハ既テ  
ニ明約ヲ履行スルナリ曖昧不決不得止我ヲシテ  
入府ニ至ラシノ然ルヲ濫出トハ何ソ不敬ナルヤ  
云ク過テリ但入府アルモ朝命ナケレハ府使ハ決  
テ迎接セス正副共ニ曰ク接不接ハ貴国ニテリ回教  
ヲ待ハ東萊ニ在テ候可シ云ク貴官等ノ意ニ任ス  
小官如何トモスルコトナシ正官曰ク訓導ノ言實ニ信

スルニ足ラス若シ信セシメントナラハ府使ノ書  
簡ヲ持来ルヘシ云ク書契領受ニ至ラサルウチハ  
書翰往復ナシカタシ副官曰ク書簡往復スラ不能  
ニ面接セントハ如何云ク面接ノ令ハ得タレトモ  
書簡ノ了未タ其令ヲ受ケス正官曰ク面接ヲ拒ミ文  
通ヲ欲セサルハ文ヲサルノ意ナルヘシ云ク此ニ  
一ノ兩便アリ先日投與アリシ書ノ回答ハ下官ヨ  
リ府使ノ委代ヲ書取り差出ス可シ曰ク是又偏便  
ナリ但府使ヨリ箇様ノ事情アレバ少シク猶豫ア  
リタシ又ハ手順未タ整ハサルニ付待レタシト乃  
チ書ヲ以テ詰ハルハ當然ナリ云ク府使ヨリ書  
面ハ決シテ差出シカタシト是ニ於テ副官ヨリ二  
月通テセシロ陳書及ヒ三月廿一日別差ヨリ府使

外務省

ニ達セシムルノ書如何ト問フニ云ク二月ノ口陳  
書ハ文意安ナラサレハ差出サス只口上ニテ陳述セ  
リ曰ク己ニ穩當トシテ領セシニアラスヤ然ルチ何  
故ナレハ之ヲ陰蔽シテ達セサルヤ云ク大日本ト  
云ヒ朝鮮各官トアル故遽カニ朝廷ニ差出シ難  
キナリ三月ノ書ハ其謄本ヲ都ヘ齎シ送レリ本書  
ハ別差ヨリ府使釜山水營ニ廻達セリ正副共ニ曰  
ク我ヨリノ書簡ハ中間ニ留メ府使ト書簡往復ヲ  
談スレハ不能ト云ヒ入府スルモ決シテ面接セス  
ト云ヒ朝命不得止ニ辭ヲ藉リ百事曖昧ニ帰シ初  
ノ我來意ヲ詳ニセシ書ヲ今ニ至ルマテ來閣セシ  
一事ニテモ壅塞ノ情狀觀ルニ足ル猶尋問スヘキ  
次差モアレハ退テ休息致サル可シト云テ位永

友輔ノ宅ニ宿セシム

同十六日晴

六十八度  
六十四度

是ヨリ先キ訓導我礼服ヲ論及

セシ書ヲ持来レトモ書中其朝議府使ニ命シ府使

ヨリ訓導ニ傳令セシヤ否ヲ詳ニセサレハ信ニ難

シト言テ之ヲ擯ス故ニ彼レ午前八時上席シテ夜

未飛脚ヲ馳セテ我言ノ信証トナルヘキ書ヲ東萊

府使ニ求メタルハ本日ノ面晤少ク時刻ヲ遅ン

コヲ請フ因テ之ヲ諾ス午後四時ニ至テ再々来ル

於是正官出席シテ曰ク其証トナルヘキ傳令ヲ一

覽スヘシ訓導乃チ府使ノ傳令ト過日持来リシ書

トチ差出ス正官讀リテ曰ク是兩書同意ナリヤ

云ク然リ曰ク此書ヲ以テ之ヲ觀レハ弥變通ナラ

サルト見エタリ云ク五條共ニ旧式ニ依ルヘキ指

外務省

令ナリ曰ク昨日ハ猶議セント欲スル所モアリト

雖トモ今此書ヲ見ルニ至ラハ最早其議不相協ヤ

必セリ故ニ我ヨリ東萊府使ニ書ヲ進シ以テ一言

ノ決答ヲ要スヘシ云ク府使ノ返簡ハ差出シ難シ

曰ク昨年差出セシ例バ如何云ク府使ノ識見ニ憑

ル曰ク然ラハ愈書簡往復モ為ス可ラストノ朝命

ナリヤ云ク其命ハ有ルニ非レトモ煩屑ニ涉ルチ

以テ之ヲ為サ、ルナリ曰ク又昨日ノ言ニ反セリ

然レトモ我今敢テ之ヲ責メス但シ訓導ヨリ府使

不以書報之者未承書簡往復之許可云云ノ末文ヲ

添ヘタル書一通ヲ差出サル可シ云ク然ラハ愚案

ニテ書契未出末書簡往復恐為煩屑故也ノ語ヲ記

スヘシ曰ク書簡往復ハ言語ノ煩屑ヲ免ル為ナリ



昨日訓導既ニ朝令ナキヲ以テ答ヘ今又煩屑ヲ以テ逃レントス是到底事ヲ阻ニテ以テ我意ヲ達セシノサルナリ愈拒マル、マ否云ク然ラハ録上ス可シ曰ク明日我ヨリ報知次節入館アルヘシ云ク諾於是正官退座訓導差出ス所ノ書左ノ如シ

東萊使道教意内

即接日前所告則事有不然者今以看見條辨之如左以此意更為詳言于館中務婦誠信相孚情誼無阻之地為可 客使礼服之隨時制宜典章權經之各有所主誠如 客使所言我國豈欲侵越而干預哉虜三百年相操之地衣製忽殊則我之驚恠疑問人情同然而况衣製之有似于我所守之地故其其衣製也非有疑於 客使也夫昔聖王禮服自有上

外務省

衣下裳之製典章昭々 客使誠欲更製何不取此而取於彼耶旧時衣服前此三百年曾又以此服成礼敬矣有何前後之不可乎大抵今日宴餉自朝廷特軫 客使遠涉蛟海屢返而久留近十年阻絕之餘別示慰勞申好之盛意也此日豈改更制度之地乎 客使之正門出入 客使所言非曰不然今日之務欲備旧式非不敬 客使而然也雖儀節間細事事係淑新則不得不禀干 朝廷在我之道唯 朝令奉行而頃者 啓聞未承 許施只以依旧式舉行之意更承申飭 客使獨不可姑從主人之言順成宴礼乎今此 客使之以是二條為名分榮辱之機閱誠不可解也若使我國更定約條之後不遵定式必欲降屈之則果係名分榮辱 使臣之

死守不易礼固然矣未有定約而不諒主人之意遽以名分榮辱作為斷棄我不敢以為過何不明辨而申言之耶 本府迎接坐席相迎屬官交椅 客使不以為辨今亦更不條辨耳 客主相接之際情誼之洽不洽在於誠信之孚不孚豈在迎接之簡不簡乎使事次第順成主 客相孚則豈非 兩國之大享主 客之義事欤我意如此須善為說辭以為享禮順成之地為宜

右使道所承 朝廷之命意也而 使道不以書報之者以書契尚未結未且書信往復未承 許可故也乃使僕轉致此意於 兩尊公前 清鑒是行

乙亥四月十二日

訓導玄昔運 印

外務省

理事官 尊公

副官 尊公

同十七日晴六十五度午後五時訓導來ル副官出接シテ曰ク昨日差出サル、書中我服製ヲ論難スルハ是我制度上ニ于預スルヲ以テ黙止ス可ラス故ニ今之ヲ辨スル所、書ヲ足下ニ遍ス故ニ貴國文際將命ノ各官弁へ廻覽セシメラレヨ是ニ於テ左ノ書ヲ付ス

本官等履約超誤忽己四閱月未嘗一經 貴國款過嚮者訓導遽然上 京尤屬反覆無信而以其書有貴服之變儀節之異不可不稟白 朝廷更俟慶分云云姑待僕之來往以圖 兩國敦好豈非義事哉云云來往不過一朝其間安心自護番期順便云云

等之語故強怒以待而及其歸報也因弄愛幻不一  
言及前約之履背所期何事美事何在更又以朝  
廷命意及府使委代之書以論服制等之事其言  
頗涉侵越本官輸誠致款不為不竭而滋端如其  
豈孰任要之兩國好交之成否在此一款故條辨  
之以陳朝鮮國交際後事各官前盡言至此萬  
非得已請明答焉衣製忽殊云云  
衣製改革之事昨秋既經示服制圖式於訓導數月  
之久豈可無訓導陳之府使啓之政府之日哉  
而今至客蒞門踰月之後曰衣製忽殊我之驚恠亦  
莫甚焉

外務省

有其衣製也非有疑於客使也云云  
我大小礼服則模倣上右之制而與時酌宜典章昭  
天下萬國誰敢容喙而今日存其衣制也非有疑  
於客使也既存我服制則存我邦也而巧言曰非  
有疑於客使也是以不存為存避存之名居存之實  
何等操弄何等無禮  
昔聖王礼服自有上衣下裳之製云云誠欲更製何  
不取此而取於彼耶云々  
聖者贊其德王著帝國之祿天下古今何國無聖王  
而我所奉戴之聖王者無他即萬世一系之  
天皇是也今所稱聖王者指何人言之乎竟何人辨  
何人為湯文武又何人也所謂因事制禮利便之所  
在古今易地皆然安容他議且上衣下裳云云似以  
我服為衣裳無制又曰誠欲更製何不取此而取於  
彼是何等侵越于預

有何前後之不可乎云云  
三百年前與今日亦皆可而無一不可者其可廢者廢之其  
其可用者用之既廢之又旋用之主推所在何之不可  
行不待智者而後知也

此日豈改更制度之地乎云云

相接儀節則和 兩情申永好之事為答其 盛意  
者儀服儼然固其所也豈有以此日改更制度之理  
哉實是鵲突不子之語

務欲從旧式非不敬客使而然也云云

昨秋 貴國始審 我邦百度維新不能其從旧式  
之由翻然改圖以開尋交之緒然則曰例曰式果指  
何等而言之乎旧式莫復有也而爾其不可曾強其  
不可強務令從之非不敬而何

外務省

未承許施只以依旧式舉行之意更承申飭云云

國議既如是乎何必須反覆陳陳接之乎不接只要  
敬一言

為名分榮辱之機關誠不可解也云云

典章之所在不容他議者前既詳論之苟容他議國  
何以獨立而 貴國以條約未定藉口以推諉名分  
榮辱之斷案輒曰誠不可解也曰不敢受以為過也  
侮蔑亦甚安可默止但以本官在尋交將命之職故  
今不強論之也乃以讓於他日主客相學云云

迎接之末節不必須刺々其至 主客相學等之語  
則 兩情無少背馳而其言雖美其事相反縱令費  
千萬言猶不可見其順成 兩國之大幸 主客之  
美事果期何時乎

明治八年五月十七日

大日本國

理事官 森山 茂 印  
副官 廣津 弘 信 印

訓導熟覽ヲテ云ク兩國間ニ從事スル奉貢ハ務メテ款  
好ヲ主トスヘキニ是ノ如キ論辯ニ涉ル書ハ下官  
ヨリ接進シ難シ曰ク我服制ヲ誹議シ何ソ此ニ取  
ラスシテ彼ニ取ルヤ杯書載セシ府使委代ノ書ハ  
訓導ヨリ差出シタルニ非スヤ自ラ論スル書ハ差出  
シ我ヨリ辨スル書ハ接進シ難シトハ何事ソ訓導  
默然タリ暫ラクシテ云ク貴意ニ適シ難キ事アラハ其時  
コソ駁論アルヘキニ一旦接受ノ上辨セラル、如キ  
ハ只議論ニ陷ルナリ曰ク否論スヘキハ論シ辨ス  
可キハ辨シテコソ互ノ真情モ露ハル、ナリ故ニ

外務省

足下ヨリノ書ハ我必ス之ヲ接シ其意ニ満タサレ  
ハ又之ヲ辨シ更ニ曖昧通避ヲ用ヒス訓導激スル  
色アリ云ク昨年正官公ヨリ隣國協和共ニ他國ノ  
輕侮ヲ受サルヲ要スト然ルニ今洋服ヲ用ヒラル  
、丁此我決シテ受サル所ナリ曰ク足下ニハ我上  
古以来服制変革ノ事ヲ兼知アルマ今ノ服ト雖凡  
古製ニ模倣シテ酌宜以テ製ヲ定ムルナリ然ルニ  
名ケテ西洋服トスルハ何等ノ所據ナルマ且各國  
皆其製ノ異ナル所アリテ同視ス可ラス況ンマ我服  
ノ如キニ於テチマ云ク然リト雖凡先ツ館内ニ  
就テ之ヲ觀ルニ或ハ従前ノ服アリ或ハ西洋類似  
ノ服アリ或ハ帽アリ又奢アリ百差千別其據ル所  
ヲ知ル可ラス曰ク我邦維新ノ始ノ 聖皇賢相時

ニ随テ宜チ制シ風チ易ヘ俗チ移シ既ニ大小礼服  
チ新製ス今後我日新聞化ノ度豈測ル可ニヤ随テ  
制シ随テ施ス我輩其令ニ遵奉スルノミ云ク此書  
ハ任官チ任官トセス府使チ府使トセサルニ似タ  
リ如是ハ持帰リ難シ曰ク兩國其所見チ陳シ其所  
疑チ辨シテコソ豁然開明ノ期アル可シ今此書チ  
チ持帰ラサレハ如何ソ我意チ通セン云ク然ラハ  
熟覽ノ上下官ヨリ答フ可シ正ニ領受致シタリ曰  
ク訓導ニ違與セシ上ハ貴國交際從事ノ官弁ヘ遍  
與セシト認ムルナリト云テ還席

同十八日晴七十八度訓導ヨリ昨日携ヘ去ル所ノ我  
辨駁書ニ左ノ書チ添ヘテ致セリ然ルニ我書ハ封  
還スルノ理ナシト云テ存存シ彼ヨリ遍セシ書チ

外務省

留ム左ノ如シ

凡於就事論事各陳所蓋務歸講明在理固當而其  
所講明不在於言語書字之侵凌強迫況主客之  
交必致相敬然後可成礼貌也僕於出入館中悉心  
致款靡不用極而夫何取侮轉甚至有來書之如是  
蔑如此果自侮之致歟貴官之不諒體禮吁亦甚  
矣寧欲無言而顧此事勢實不可一日冒居此任自  
損國體故欲請罪俟勅於朝廷何必辨說於館  
中乎第書示中有曰陳于朝鮮國各官云者非特  
無例無據縱意作書欲使翰鑑於隣國之各官可  
謂有礼チ無礼チ貴國近日衣服即古時礼制云  
然則其何中廢於貴國傳行於他國而貴國之  
復旧適在於他國通和之後乎我國則但所見有同

於所存之地故疑恠為問者而文隣係是 兩國重  
大之事則非任官之所可擅斷况宴儀相持竟至如  
是不可不更報 京司以俟 處分矣日子曠費雖  
是悶然惟希 清亮

送來書意在或有不可受而受之故元本茲封  
還而自外入去書意之有不可收領者亦為還  
亦是企

乙亥四月十四日

訓導玄普運 印

理事官 尊公

副官 尊公

同十九日晴 六十八度 浦瀨書記生ヨリ 昨日訓導致ス  
所ノ書ニ答ヘシムル丁左ノ如シ

送來單札收領以呈 西官公前有 啟曰凡有公

外務省

幹辨理之書無來而不受之無受而不辨之也來書  
中復論 我服制干預亦甚矣其曰陳 朝鮮國交  
際從事各官者陳之於其可陳之人云爾耳固非泛  
言旁林 訓導則為其官使道亦其官上之則禮曹  
各位亦其官也皆是可得陳之人 訓導枉為翰繼  
之於 朝鮮全國各官以語例与礼之有無不亦証  
哉其他涉私情者不須論之也 僕養此教以轉致之  
於公今 公更報 京司以俟 處分之事實是  
兩國重大之公幹為望速報其 回放不備

昔日所携去之答辨書固無封還之理故既付付為

明治八年五月十九日

浦瀨書記生

同二十日晴 六十六度  
同廿一日晴 六十六度 訓導ヨリ左ノ書ヲ致ス

送來滿幅 示意次第詳悉而 貴弊間不可以自  
引張皇相持也事係重大不能自專方修報 京師  
矣待回下可以就議 深諒、、為不備  
僕則以薄劣之致自 本府請罪 京師矣將未  
知處分何如而俟勅之中不敢以公幹往復然既  
有送示幸茲終謝耳

乙亥四月十六日

訓導 印

此日渡航以來ノ應接ニヨリ向後着手ノ擬議ヲ建  
テ應接撮要目安及ヒ辨論書并二十四日ヨリ十七  
日マテノ應接書ト着轉以來ノ往復書トヲ認ノ五  
等書記生山之城祐長ヲシテ歸報セシムル丁ニ決ス

同廿二日晴六十七度今夜十二時山之城祐長東京ニ  
發セリ七十一度茅五号公信并二前ニ寫收スル所ノ大典會

外務省

通及ヒ兵法指南ノ書ヲ附ス

同廿三日陰六十八度

同廿四日晴六十六度

同廿五日晴六十五度午前十一時軍艦雲揚号入港來

組官負左ニ

海軍少佐 艦長 井上良馨

同 中尉 川村換秀

同 中尉 小笠原恒通

同 中軍醫 小科俊長

同 中機関士 星山巨欽

同 少尉 測量 立見 研

同 少尉 角田秀松

同 少尉 平原兼論



同 少主計 八洲 亨

同 十等出仕 高田 政久

同 少尉補 神宮司 純粹

其他十一等下士以下六十五人

同廿六日晴七十三度 版制論辨ノ末訓導諸罪待勅ヲ  
唱フルヤ其意公幹往復ノ路ヲ阻テ以テ我寬急動止ヲ窺ハシ  
トノ黠策ニアリ然ルニ不圖雲揚艦渡来シ彼レ頗  
ル驚駭嚮者ノ勢ニ反シ遽然館ニ就キ恭順以テ来  
艦ノ情ヲ問ントス其恬然無耻ハ彼カ常態ト雖モ  
後撰彷徨モ亦以テ推知スルニ足ル因テ午前十二  
時正副官應接訓導云ク昨日流船渡来如何ナル  
ナルヤ曰ク朝廷ヨリ我輩ニ使事延滞ノ情ヲ尋問  
ノ為ノ渡来セシナリ云ク艦長ノ姓名及ヒ乗組人

外務省

負裁許ナルヤ敷乗リタシ曰ク艦長ハ海軍少佐井  
上良馨乗組人負九百人許リナリ云ク渡来ノ旨趣其  
詳ヲ兼リタシ曰ク曾テ言フ如ク我邦使負ノ他目  
ニ派遣セラレ、ヤ保護ノ為ノ必ス軍艦ヲ添ヘラ  
ル、ハ通例ナリ嚮者花房外務大丞、来ル以テ見  
ルヘシ而ルニ我輩ハ貴國ノ情ヲ酌ミ一旦之ヲ特  
シタレモ斯ク使事ノ淹滞スルハ意外ナリトテ我  
輩ハ其事情ヲ尋問ノ為ノ渡サレシナリ云ク此際ノ  
渡来内情稍疑難ニ涉レリ曰ク是レ我朝ノ特命ニ  
出テ我輩ノ敢テ議ヲ容ルヘキニ非ス且曾テ照會  
セシ如ク今後此近海通航ノ船艦モ益々多カラン  
ニ若シ貴國左右邊海漂到セハ例ニ依テ保護コレア  
リタシ云ク問情、為ノ其船ニ入ルハ我カ國ノ

例規ナレハ入艦致シタシ曰ク他ノ浦津ニ擊泊セ  
シ時ハ勿論ト雖モ公事アリテ此館ニ来ル船ハ館  
ニ就テ問情シテ可ナリ且軍艦ハ一海城ノ如シ規  
律至嚴我輩ト雖モ根リニ至ル可ラス只艦内一覽ヲ  
布ツトノコナラハ一應艦長ニ頼談ス可シト雖モ  
一般商船ト例視ス可ラス云ク然ラハ拝見ヲ請フ  
曰ク諾於是訓導思慮スルコアルカ如ク復更アリ  
テ云ク軍艦トアリテハ夫々手數ヲ経シ上エニテ  
更ニ頼談ス可シ曰ク諾我輩使事淹滞ノ責問ニ遭  
フ莫ニ惶悚ニ堪エス訓導ニモ益尽カ致サルヘシ  
云ク下官ノ盡カハ其分ナレトモ各位ノ滞留珍念  
ニ堪ヘサルナリ曰ク近日中其事ニ付テ面議ニ及  
ブ可シ云ク今日即チ議到セラレマシクヤ副官曰

外務省

ク兩三日中其期チ通知ス可シ云ク諾以上應答ノ  
間彼レ始終恐懼ノ貌アリテ浦瀬書記生等へ別ニ  
懇情チ申告シ以テ退館セリ但シ雲揚艦ノ渡来ハ  
彼カ待勤ノ點策チ擊破シ尚ホ暗ニ將來ノ聲援チ  
張ルニ似タリ此日井上少佐来話アリ

同廿七日晴六十七度正官石幡尾潤西書記生チ随同  
シテ雲揚艦ニ到ル

同廿八日雨六十八度雲揚艦長ノ話ニ差ニ丁卯高雄ノ  
西艦モ不日入港スヘシ而シテ高雄艦中ニ御座西洋  
人案組アリト云今服制談論ノ際此事アルニ於テ  
ハ只彼ニ辞柄チ予フルノミナラス却テ我前言ノ  
反信ニ屬スルチ以テ特ニ副官ノ從士高橋定重チ  
對馬ニ差シ書チ丁卯艦長青木佐真高雄艦長今井

兼輔ニ寄セ本地ノ畧状ヲ述ヘ西洋人衆組未ラサ  
ルヤウ依頼ス風雨ニ阻テラレテ發セス  
同廿九日晴六十三度高橋定重飛船ヲ發シテ巖原ニ向フ  
廿六日ノ接話中ニ兩三日中面議スヘキ件アリ其時通  
知ス可シト約セシニヨリ今日浦瀬書記生ヨリ左  
ノ書ヲ寄ス

訓導 玄公前

理事官公ノ 故意ニ向者言約ノ如ク面晤スヘキ  
コアリ故ニ從速下來アルヲ企望ス仍照會焉  
明治八年五月廿九日 浦瀬書記生  
訓導ヨリ返翰左ニ

幹傳官 公前

示意詳悉而方有 使道故意將下去之際有此書  
示羨當明日面晤留焉

外務省

乙亥四月二十五日 訓導 印

同三十日晴六十四度訓導別差就館正副官應接副官曰ク昨日浦瀬ニ  
答ヘラレシ書中使道ノ故意アリト其意如何云ク款好商量中忽  
チ軍艦渡來上下ノ疑惧不少就テ問フ可シトノ教  
意ナリ曰ク我邦外國へ派スル使臣ハ軍艦ニテ護  
送セラル等ノ丁曾テ通告ヲ經タリ又既ニ派スル  
使臣及ヒ外國在留官負等へ命ヲ傳ヘラル、ニ軍  
艦ヲ以テスルノ例亦アリ貴國人民疑惑ノ情アラ  
ハ右ヲ以テ論サル可シ軍艦ノ名ニ泥ミ誤認シテ  
戰爭ノミニ用フルモノト為ス勿レ云ク然ラハ懸  
念ニモ不及コナレド不審ノ餘リ云再ノミ曰ク使  
事延滞責問ノ為派遣セラレシコナレハ我等コソ

惶悚ニ不堪ナリ然ルニ前日啓開アリシ一欵ノ回  
教ハ何日頃達スルヤ其日期ヲ訂シテ告テ、ニ  
於テハ内國へ上報ノ辨モ有テ此上軍艦ノ派遣無  
之ヤウ上請ノ辭モアルヘシ云ク料ルニ來月十五  
日我六日頃ニハ回教アル可シ然レハ確答致シ難  
シ正官曰ク來月ハ使事完全ノ功ヲ歸奏ス可シト  
思ヒシニ意外ノ延滞ニ及ヒタリ我國ノ此延滞ヲ  
怪マル、ハ貴國ノ我軍艦ヲ怪マル、ヨリモ甚シ  
云ク兩官公ノ苦衷實ニ感戴セリ我國ニ於テモ何  
ソ一ニノ軍艦ヲ恐ル、ニハ非レハ竊カニ貴國和  
好ノ意ニ及スル等ノ説ヲ起スモノアリテ掛念ニ不  
堪ナリ曰ク年來我國ノ盡ス所ト貴國ノ為ス所ト  
ノ跡ニ就テ見レハ了々々我使節ノ各邦ニ至ル

外務省

モノ多シト雖モ未タ嘗テ如是境上ニ渋滞セルト  
ナシ況ンヤ我服制ニ干預スルカ如キ萬國ニ對シ  
テ甚タ愧ル所若シ事物如約順成ニ至ラハ何ソ軍  
艦ノ來ルアランヤ云ク至當ノ理ナリトイハレ我  
國ハ舊誼ヲ追ヒ舊式ニ從フトノ議ヨリ如是齟齬  
淹滞ニ及フト雖モ固ヨリ交ハラサルヲ得サルノ  
國ナレハ必竟服制ノ下協辦ニ至ラハ事順成ニ就  
ク可シ而ソ委曲早已ニ上伸シ置タレハ只其期ヲ  
待ニアリ正副共ニ曰其回教ハシカト期シ難キヤ  
云ク速ナルヲ企望スルハ固ヨリニシテ確答ハナ  
シ難ケレハ必ラス來月二十日前後ニアラン副官  
云ク足下スラ確答シ難キ日期ヲ我朝廷ニ上報ス  
ヘカラサルハ推知セラルヘシ云ク本日ハ別テ總

談ニ與カリタレハ我國情を吐露スヘシ昨年清國  
日本朝鮮ノ三國ハ同文ノ國ナレハ和同共力以テ  
外侮ヲ禦クヘキトノ高議アルニヨリ多少盡カセ  
シニ豈圖ニヤ先月小官上京スルヤ即チ十日程入  
城ヲ差止メラレタリ其仔細ハ曾上伸セシ意ト本  
年現狀陳述セシト大ニ相違アリ日本人ニシテ異  
服ヲ著ルハ決シテ信シ難シ唯三百年來ノ式ニ循  
フテ接ス可シト命セラレシト其後兩公ノ高議  
ハ再ヒ啓報ニ及ヒタレハ服色古ニ變レ其入日  
本人タルニ相違ナクハ接待ス可シトノ回報アル  
マシキモ計ラレス然リト雖其成否ハ小官ノ見  
込ミコレナシ去ク我輩ハ昨年ノ約ヲ終ヘヨトノ  
命ヲ奉シテ渡航セシ上ハ水火ノ中ト雖必ス其

外務省

決答ヲ取ラサル可ラス去ク都表ノ善報モアルハ  
キヲ察スルヲ以テ本日モ入館セシナリ只暫時緩  
待アラントテ乞フ其内左右ノ回教在ルアラレ曰  
ク何ノ國トシテカ隣國ノ使員ヲ門外ニイマセテ  
回報セサルノ理アラニヤ於是兩官退席訓導浦瀨  
ニ語テ去必ス近ク順便ノ報ヲ得ヘクト察スレテ  
今其期ヲ明言シ若シ之ヲ愆ラハ此上信ヲ失ハン  
トヲ恐レテ敢テ言ハサレ共必ス近日中公報私信  
何レカ判然タラン兩官公ニモ宜シク添縫致サレ  
タシト憑依シ且過日依頼セシ軍艦拜見ノトハ先  
見合スヘシト去テ退ク

同三十一日<sup>六十七</sup>度軍艦ニ於テ晝夜トナク時々空  
砲ヲ發スルヲアリ以テ驚ク勿レト浦瀨ヲシテ通事ニ達セシム

六月一日晴 六十四度 理事官二三官負ト雲揚艦ニ到  
 止練兵了リ大小砲五十發聲山海ヲ震動ス帰ルニ  
 臨テ驟雨アリ

同二日陰 六十六度

同三日雨 六十七度

同四日晴 六十三度

同五日晴 六十五度

同六日晴 六十六度

同七日晴 六十八度

同八日陰 六十六度 風烈シ

同九日晴 六十四度

同十日晴 七十二度 過去将来ニ甘テノ見込アラハ差  
 出ス可キ旨在勤官員中ニ達ス

外務省

同十一日晴 六十八度

同十二日雨 六十七度 午前九時 二丁卯艦渡来

組官員左ニ

海軍大尉 艦長 青木 任真

同 中尉 大類 義長

同 同 吉田 重親

同 少尉 宗道 幸七郎

同 少軍医 鳥居 忠章

同 少機関士 前田 利

同 主計副 大谷 重雄

同 少尉補 金木 十一郎

同 同 三浦 重郷

同 水路十一等出仕 狩野 應春

同 水路十五等出仕大木 延建

同 同 高野 瀬廉

外ニ下士十三人 海兵水火夫五十人

總計七十六人

本省ヨリ莠四号ノ公信達ス

同十三日晴七十一度 午前十一時 訓導就館又軍艦ノ  
来意ヲ問フ正官曰ク貴國決答ノ日期確定セサル  
故前艦徒泊我邦懸念ノ餘督促ハ為ノ又々一艦ヲ發  
遣セラレタリ苦念ノ外ナシ云ク公幹回報ノ日期早已  
ニ畧定アルニ猶軍艦ヲ發シ督促アルハ怪談ニ屬セ  
リ而シテ昨日ノ来艦一覽ヲ請フ曰ク軍艦ノ来意ハ  
我輩ニ関スルコトニテ肯テ貴國ニ干セズ且前日ノ  
一艦ハ己ニ一見ニ不及ト云ヒ今日ノ艦ノミ一覽セン

外務省

トアリテハ 兩艦ノ間ニ異見アラニ須ラク兩艦トモ  
一同ニ頼談スヘシ云ク固ヨリ願フ所兩艦共ニ一覽ヲ  
許サルニ至テハ幸甚曰ク先ツ艦長ニ照會ス可シ  
且ツ今後軍艦ノ追發アルモ貴國ニ於テ另ニ心労  
セラル、ニ及ハス云ク案スルニモ非ス案セサル  
ニモ非ス曰ク公幹ノ事貴國決答ノ期限モ己ニ六  
七日ノ間ニアレハ萬ツ其時ヲ待テ議ス可シ云ク  
諾於是正官退席少時アリテ兩艦長ヨリ午後第一  
時来艦ヲ待ツノ回答アリ期ニ及テ住永書記生ヲ  
シテ訓導別差以下通事輩十八名ヲ率ヒ先ツ雲揚  
艦ニ至ル艦長接遇甚厚ク火入調煉ヲ見セシム頃  
史ニシテ兩艦齊シク炮門ヲ開テ發射ス山鳴リ海  
立テ烟焰四モニ塞ル初一發訓導別差恐怖艦上ニ

立ツ丁能ハス共ニ耳ヲ蔽フテ蹲踞シ式未ダ半ハ  
ナラサルニ之ヲ止ント乞フヲ辱ミナリ海軍諸員  
憫笑ニ堪ヘス乃チ止ム再ヒ丁甲艦ニ至ルト雖モ  
又發砲アラントヲ忍レテ忽クニシテ還ル此行彼  
輩ノ膽ヲ冷スト尤モ甚シト雖モ務メテ其醜態ヲ  
掩フノ状ヲナス実ニ見ルニ忍ヒス而テ機械砲廠  
其他艦内百般ノ整肅ナル駭目聳聽セサルモノナ  
シ午後三時退館驟雨アリ

同十四日雨七十一度茂六号公信ヲ發ス

同十五日晴七十八度正官雲揚丁卯兩艦ヲ訪問ス

同十六日晴七十九度午後雨降ル

同十七日雨七十一度

同十九日晴七十一度浦瀨書記生ヨリ左ノ書翰ヲ贈

外務省

リ入館ヲ促サシム雲揚艦拔錨發程ス夜十二時三  
十分ナリ

理事官公ノ教意ニ面晤スヘキ事アリ從速就館  
ヲ請フト因テ爰ニ照會ス

明治八年五月十九日 浦瀨書記生

同二十日晴七十八度訓導ヨリ左ノ回答アリ

幹傳官公前面上

昨日惠書ハ適因水營往來未趣修謝今終承審  
啓居比來清迪欣浣曷己 示意詳悉而雖無此  
或後近奉晤為計矣茂於二十日下去スヘシ以此  
俯諒セラレヨ為此暫上

乙亥五月十七日 我本月二十三日當ル 訓導 印

同二十一日晴七十一度



同二十三日雨<sup>七十七度</sup>

同二十四日晴<sup>七十七度</sup>

遂ニ来ラス

同二十四日晴<sup>七十七度</sup>午後三時訓導入館正副官應  
接正官曰今日ハ兩國好交成否ノ一段ナレハ婉曲  
ノ語ヲ用ヒス判然貴國ノ決答ヲ承ハラントス如  
何云ク京報漸ク達セリ日本ト信ヲ失ハス從前ノ  
如ク善ク交ルヘシトハ故意ナリ曰ク前ニ遞交セ  
シ書牘ハ悉ク迎進セラレシヤ云ク彼書ニ朝鮮各  
官トアリテ我在廷諸公ノ覽ニ供ヘ難ク故ニ另ニ  
謄録シテ之ヲ上申セリ副官曰ク各官ヘアテシ所  
以ハ前ニ既ニ辨シタレバ再ヒ贅セス抑我服製ノ  
變通ナラサルハ屢次條辨ニ尽セリ而シテ今日貴

外務省

ニ依テ交ルヘシトノ丁到底新版ヲ用フル片ハ相  
接セサルトノ意ナリヤ云ク現ニ館中居留ノ人ヲ  
觀ルニ新旧混同ノ服アリ故ニ請フテクハ旧服ヲ  
以テ相接アリクシトノ議ナリ曰ク愈新版ハ以テ  
忤クヘシトノ決答ナリマ云ク然リ新版ニテハ斷  
然許施スヘカラストノ敬意ナリ正副官曰ク然ラ  
ハ其命意ヲ書テ交甘セラレヘシト少ク訓導左ノ  
書ヲ出ス

以相接儀節之時 貴國服制違旧相持事已仰稟  
干 朝廷矣 回下内 兩國交隣古今一般不獨  
服制凡例違旧則不可許施之意詳確為 教而  
使道敬意亦如是故茲以仰陳 俯諒焉

乙亥五月二十一日 訓導玄普運 印

理事官 尊公

副官 尊公

両官接収通覽セリ訓導云ク今日ノ拜晤ハ共ニ歡  
フ可キ會合ナリト曰ヒシニ望外面目ナキ次第ナ  
リ正官曰ク交誼講明ハ共ニ便法ヲ議ル可シトイ  
ハ正事此ニ至リテハ實ニ兩國ノ大事ナリ我輩思  
量ノ不及所ナリ何レ近日猶面晤ニ及フヘシ云ク  
諾

同二十五日<sup>七十九度</sup>訓導入館浦瀬<sup>萬一過ル</sup>因テ云  
ク昨日版制違<sup>旧云云</sup>ノ決答ハ己ニ其意ヲ領スト  
雖モ昨年所約ノ<sup>一</sup>ハ貴國以テ如何トナスヤ云ク  
前約ノ履行ハ府使面接ヨリ始ルナリ而シテ今面接  
ノ議協ハス其約ノ講明モ亦為スニ由ナシ我國約

外務省

ヲ廢スルヲ欲セサルヲ以テ府使面接ノ談ニ及フ  
而シテ其談ノ整ハサルハ遺憾ト云ヘシ若シ面接ニ  
至ラハ主客互ニ後事ヲ熟議シ以テ事成ル可シト  
言テ退ク

同二十六日晴<sup>七十二度</sup>

同二十七日陰<sup>七十二度</sup>浦瀬書記生ヲシテ左ノ書翰

ヲ贈リ訓導ノ入館ヲ促カシム

理事官公ノ敬意ニ面晤スヘキ<sup>一</sup>有リ從速入館  
ヲ請フ仍照會焉

明治八年六月二十七日 浦瀬書記生

同二十八日雨<sup>七十一度</sup>午前八時二十分高橋定重嚴

原ヨリ帰館ス訓導ヨリ昨日ノ返書ヲ致ス左ニ  
從速就館ノ意ヲ申遣ハサレ承知セリ數日間下

去スヘシ

乙亥二十五日

同二十九日陰七十一度浦瀨書記生ヲシテ又左ノ書翰ヲ投シ訓導入館ヲ促サシム

理事官公帰期在邇故ニ至急面晤セラレヘキ事アリ從速就館アルヘシ茲更照會矣

明治八年六月二十九日 浦瀨書記生

訓導ヨリ左ノ返書アリ

夜深後獲承

委贖而明當下往奉摠計耳暫上

乙亥五月廿八日

訓導

雲揚艦帰来艦長井上少佐ノ話ニ感鏡道永興ニ泊スル丁凡ソ三日稍湾中ノ深淺ヲ測量セリ此地ハ

外務省

北面ノ良港ニシテ大河湾ニ注クモノ六條アリ一

日端船ヲ以テ之ニ洩ルコト三里測ルニ猶小瀧船ヲ

容ルニ足ル兩岸葭蘆弥望平地多シ湾中ニ一小島

アリ製塩場ヲ設クルコト數所蟹戸處ニ散布シテ

土人頗ル質朴利ヲ以テ誘スレハ太夕馴レ易キニ

似タリ或日一民家ノ火災ニ罹ルヲ見ル戸主狼狽

奔走スレトモ傍人恬然觀望シテ救フノ意ナシ故

ニ我艦ヨリ兵士ヲ遣シ消防器ヲ送り之ヲ救ヒ災

主ニ韓錢五百孔ヲ給ス夫妻合掌シテ泣謝ス既ニ

シテ錨ヲ拔キ帰路慶尚道迎日湾ニ入ル此レ良港

ト云フニ非レトモ東北面ノ一港トス地形平坦ニ

シテ頗ル沃壤人家亦多シ慶州縣令我艦ノ入港ヲ

見ルヤ兵數百ヲ率ヒ次官ヲ派シテ来意ヲ訊問ス

其モノ筆シテ曰ク好酒ニ箇請給之ト我赫怒之ヲ  
擯ス即チ中尉以下數名兵士ヲ具シテ上陸其張幕  
中ニ入り縣令ニ面シ以テ酒ヲ請フモノトテ問  
フ長官愧且ツ怒リ忽チ次官ノ官服ヲ剥キ土上ニ  
偃臥セシノ棍ヲ拳テ打タシメントス其酷虐見ル  
ニ忍ヒス中尉等寛サンコトヲ請フ再三ニ及テ漸ク  
放チ其過チヲ謝シ話ヲ了リテ上艦ス居ルコト半日ニ  
シテ技錨セリ此時其兵士等携フル所ノ器械ヲ見  
ルニ日本ノ古銃及ヒ竹槍ノ如キモノニテ其狀貌  
實ニ一突ニ堪タリト此日雲揚蹄着港ノコトヲ任官  
ニ通知ス

同三十日晴

七十三度

午前十時雲揚艦技錨内地ニ歸  
ル午後二時訓導別差就館正副官應接正官曰ク府

外務省

使面接ノ議ハ其道己ニ絶ヘタリ而シテ前約ハ如何  
セラレ、マ又另ニ和好ヲ保ツノ道アリヤ否是兩  
國ノ大事ナルヲ以テ更ニ問ヲ為スナリ云ク和好  
ヲ保ツノ意アルカ故ニ相接儀節ノ議ニ涉レリ而  
シテ其議不相協ハ如何トモスヘカラス曰ク其和好  
ノ意アラハ何ソ我變通ナラサルヲ知テ論ヲ服制  
ニ及ホスマ其意實ニ和好ニ在ラサル可シ云ク曾  
テ旧服モ共ニ用ヒラルト承ルヲ以テ此事ヲ  
懇談セラルトナリ曰ク我礼服一定更ニ二様ナシ  
且服制ノ儀己ニ前日ノ説話ニ盡セリ今更ニ問フ  
所ノモノハ此ニアラス我輩約ヲ履ミ信ヲ守リ五  
ケ月ヲ曠過スレト一言前約履背如何ノ答辯ヲ聞  
カス故ニ若シ另ニ之ヲ終ルノ道アルマト問フナ

リ曰ク服色ノ了ヲ以テ相持スル久シト雖臣國ヨ  
リ和好ノ意ナクシテ云再ニアラス曰ク否己ニ此  
件ヲ以テ許接セスト決答セラレシ上ハ於我ハ和  
好ヲ議ルノ道絶ヘタリト見サルヘカラス是貴國  
昨約ヲ措テ他議相持シ以テ隣國ヲ侮弄スルナリ  
雖然交際ハ兩國ノ大事之ヲ保ツノ道アリヤ無キ  
ヤ後日ノ遺憾ヲ免カル、為ノ今改テ問及ブナリ  
云ク廟議己ニ爰スルニ至テハ府使モ下官モ亦另  
ニ之ヲ保ツノ答ヲナスヘキナシ曰ク然ラハ前約  
ハ恬然措テ不問ナリ云ク服制ノ議再三啓聞己ニ  
回教ノ意ヲ陳呈セシト雖臣頃日郝ヨリノ私信中  
朝廷別真ヲ派遣セラレヘシトノ事アリ忍ラクハ  
此公幹周便ヲ高ル為メナルヘシ正副共ニ曰ク貴  
國己ニ拒接ノ決答ヲ為シ今又誰人カ派遣アルヘ  
シ又ハ私信中云云等ノ了我輩敢テ聞ク所ニアラ  
ス貴國ニ於テ此上議セシトスル所アレハ使ヲ派  
シテ以テ之ヲ謀ルモ可ナリ云ク昨日ノ瀛船ハ如  
何ナル船ニシテ今日又忽チ開往セシヤ曰ク先ニ  
碇泊セシ雲揚号ニシテホツセツトヨリ帰リシニ  
昨日貴國決答ノ辞ヲ聞テ又速ニ帰國セルナリ云  
ク未タ来意ヲ問ハサルニ忽チ出港セシハ甚タ不  
審ナリ曰ク昨日既ニ着港ノ了ヲ通知ス今又出發  
ノ了ヲ照會セリ何ゾ足下ノ問ヲ待テ後進退セン  
ヤ云ク然リト雖臣我海岸ニ来往ノ艦ハ我國ニ関  
セサルノ理ナキニ非ス曰ク然ラハ何ゾ速ニ来リ  
問ハサルヤ軍艦ノ出入今後ト雖臣何時ヲ期ス可

外務省

ラス心得置ル可シ去ク仕所ニ在ラスシテ間情遅  
引セシハ無念ノ至リナリ爾後宜ク斟酌ヲ乞フヘ  
シト言テ退ク 同四時副官上京一同ヲ會シ別宴  
ヲ張ル

七月一日陰七十七度此日書ヲ以テ副官上京ノヲ  
訓導ニ告ク

同日雨七十七度與義制ヲ東京ニ浦瀬裕ヲ嚴原ニ  
歸ルヘキヲ命ス指令書左ニ

三等書記生與義制

御用之都合有之候條歸京申付候事

八年七月二日 理事官森山茂

三等書記生浦瀬裕

御用有之歸縣申付候事

外務省

八年七月二日 理事官森山茂

同日雨七十七度午前第七時副官一行旅装已ニ整  
ヘ門ヲ出ルニ及テ訓導ヨリ左ノ二通ノ書ヲ致セ  
リ

幹傳官公前

霖意乍晴獲承

起居清迪慰瀉曷已

副官公啓様在即公亦陪従スト萬頃滄浪閑念非  
細事當即日下往穩摠叙別ハズナレモ適因雨濕  
痰苦既無以振作故不得如意道贈 行旋不勝忡  
悵此意ヲ 副官公ニ通告セラレシテ乞フ臨紙  
尤極テ残りタシ 行旆环重是希々暫上

乙亥五月晦日

訓導印

幹傳官  
三代官  
金公前

即見 京奇則 金知事聖始公以別遣堂上下來  
而來初可以抵此矣茲以相報以此意詳告  
理事正公副官公前セラレヨ公幹ノ事別遣堂上  
下來ノ後可詳耳為此暫上

乙亥五月晦日

訓導印

古別遣下來ヲ報スルト雖氏既ニ不應ノ決答ニ及  
ヒタル上ハ一日モ上申ヲ忽ニスヘカラス故ニ副  
官滿珠艦ニテ發ス與浦瀨共ニ同船ナリ第二丁卯  
艦モ亦東歸ス此日館内商民ニ副官上京ノ旨ヲ布  
達ス

同四日晴	七十三度	同三日	此日朦霧四塞丁卯
同五日晴	七十四度	艦ト並行スト雖モ互ニ	
同六日雨	七十五度	相見ル能ス午後五時嚴原ニ着	
同七日陰	七十六度	同四日風雨甚シ船ヲ駐ム	
同八日陰	七十七度	同五日午前第二時嚴原ヲ發	
同九日晴	七十七度	ス午後第六時長崎港投錨	
同十日晴	七十七度	同六日 電信ヲ以テ理事一行	
同十一日晴	七十七度	進退ノ指教ヲ外務卿ニ仰ク	
同十二日晴	七十七度	同七日 外務卿ヨリ電信ヲ以	
第六号ノ公信達ス		テ速ニ上京親シク上申セヨト	
同十三日陰	七十七度	指令アリ	
同十四日雨	七十七度	同八日	
同十五日晴	七十七度	同九日 午後第四時末國郵	
同十六日陰	七十八度	船ニ乗テ長崎ヲ發ス	

外務省

崎陽ニ至リ電信ニ憑テ指令ヲ 伺ヒ直ニ迎艦ヲ返スノ約ナリ	同十日
而ルニ今ニ其事ナシ計ルニ 指令未ク至ラス直ニ上京 セシナラシカ別遣下来ノコ 今ニ其影迹ヲ聞カス因テ副 官發後ノ現状ヲ陳シテ速ニ 進退ノ指令ヲ待ツノ旨ヲ上 申セント即チ茂七号公信 ヲ裁ス	同十一日 同十二日 同十三日 同十四日 同十五日
同十七日晴ハ十一度本日本 國別遣堂上金知事 <sup>聖</sup> 運 <sup>字</sup> <sup>始</sup> 正一 <sup>品</sup> 東萊ニ着十九日就	同十六日 同十七日
館スヘキヨシ語學助教佐 永支輔ニ左ノ書ヲ贈レリ 但シ友輔トハ前年相識 ルヲ以テノ故ナリ訓導ヨ リハ何等一言ノ添啓ナシ 友輔三代官公前工 積年阻懷不湏説此暗 庚亥 公候 辛卯ナル ヤ承リタシ僕ハ	同十七日 同十七日
外務省	
七十先翁路儀難振剛憐奈何調攝ノ上十七日間 下往イタスヘクト存スル因テ左様御承知下サ レタク為先安信ナリトモ承リ度ソンス數字暫	ト其退ト駐トヲ問ハス必ス 清國ニ照會スヘキトノ三議 并ニ清國朝鮮西國関涉ノ 近状素等ヲ呈ス尔後東京ニ 在テ理事官進退及ヒ雲揚艦 炮撃ノ件ニヨリテ理事官再 渡再帰等ノ事ニ斡旋スト 雖臣今思ス



上

乙亥六月十四日

聖始金知事

同十八日晴八十一度

同十九日晴八十九度

午後一時金知事入館ス訓導  
 別差之レニ從フ別席ニ於テ七等書記生往永辰安  
 并ニ任永友輔ヲシテ面晤其來意ヲ問ハシム知事  
 云ク兩國緊重ノ事件ニ自某今般別遣ノ命ヲ奉シ  
 來レリ特ニ理事官公へ面議ノ紹介ヲ乞フト書記  
 生曰面議ノ趣意如何云ク貴國トハ到底和好ニ帰  
 セサル可ラサルヲ以テノ故ニ面議ヲ請フナリ曰  
 ク六月廿四日貴國既ニ不許接ノ決答ニ及ハレ其  
 後猶更ニ另ニ和好ヲ保ツノ道アリヤト尋子ラレ  
 シニ無之トノ答アルヲ以テ副官先發其背約ヲ上  
 奏セラレシコト定メテ聞知アリタルナラシテ正  
 官ハ暫時滞館以テ公務ヲ結末スト雖モ迎艦ノ未  
 ルヲ待テ速ニ帰朝アル可キナリ皆是貴國拒接ノ  
 決答ニ依ル所ニシテ今又何ヲカ議セントスルヤ  
 抑前議ニ反シタル好意有テノコトナルヤ云ク必ス  
 シモ然ラス曾テ訓導ヨリ陳述セシ如ク新服ニテ  
 接スレハ則チ新例ヲ叙ルナリ新例ヲ叙ムレハ我  
 國ノ福ヲ去ルナリ因テ茲テ旧ノ如ク舉行ス可キ  
 ノ令意ニテ尚別遣ヲ以テ鄭重陳言ス可シトコト  
 ナリ故ニ先艦ヲ厭ハス下未セリ曰ク前後一議ヲ  
 以テ面晤ヲ請ハル、モ畢竟無益ノコトナラスヤ云  
 ク然リト雖モ朝廷特ニ別遣セラレシコトナレハ願  
 クハ申請セラレコトヲ祈ル曰ク諾此日訓導曾テ

外務省